

# 波田須城跡発掘調査報告

—熊野市波田須町—

1993・3

三重県埋蔵文化財センター

## 序

広大な面積のは場整備事業や道路改良及び河川改修などの公共事業、また民間企業による開発事業に伴う埋蔵文化財の保護に関する取り扱いは年々増加の傾向にあります。

三重県教育委員会では、文化財保護行政の一環として、各開発関係部局の事業を照会し、事業予定地域内の文化財の確認とその保護に努めてまいりました。

ここに報告する熊野市波田須町所在の波田須城跡は、平成4年度一般国道311号道路改良事業に先立ち、事前協議の結果、現状保存が不可能な部分について発掘調査を実施し、記録保存されたものです。

今回の調査で、堀切や平坦部が確認されました。

波田須城は、記録にその形を留めたとはい永遠にその姿を変えてしまいました。私たちは、今後の文化の発展向上の礎としていくためにも祖先の残したこれらの歴史的遺産を貴重な財産として保護し、後世に伝えていかなければなりません。

調査にあたっては、県土木部道路建設課、熊野土木事務所、熊野市教育事務所、熊野市教育委員会をはじめ、地元の多くの方々の惜しみないご理解とご協力を賜りました。文末ながら記して深く感謝の意を表します。

平成5年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 久保富子

## 例 言

1. 本報告書は、平成4年度一般国道311号道路改良事業に先立って行われた緊急発掘調査の結果をまとめたものである。

2. 調査は次の体制で行った。

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県埋蔵文化財センター

係長 河北 秀実

主事 高崎 仁

3. 調査協力 阿田和小学校教諭 福村 直人

御浜小学校教諭 田中 安弘

尾呂志小学校教諭 古部 均

上記の熊野地区文化財調査員の先生方をはじめ三重県土木部道路建設課、熊野土木事務所、熊野教育事務所、熊野市教育委員会ならびに地元の方々の協力を得た。

4. 本報告書の執筆・編集は高崎が担当した。

5. 方位はすべて磁北である。

## 目 次

I. 前言	1
II. 位置と環境	1
III. 遺構	2
IV. まとめ	3

### 図版目次

P L 1	調査前全景 東から
	調査前近景 南から
P L 2	調査区全景 東から
	調査区全景 北から
P L 3	平坦部 北から
	堀切 東から

### 挿図目次

第1図	遺跡位置図	1
第2図	遺跡地形図	2
第3図	堀切断面図	3
第4図	調査前地形測量図	4
第5図	調査後地形測量図	4

6. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。

各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

## I. 前 言

波田須城は、『三重の中世城館』によると、3段の平坦面と北側に明瞭な堀切が残っているとされている。このうち平成4年度一般国道311号道路改良事業によって、保存困難な堀切と平坦部について発掘調査を行うことになった。

発掘調査は、調査区の現地形を測量した後、尾根を横切るように3本のトレンチを設定し、土層の確認を行った後、南から北に向かって進めた。斜面の掘削は尾根の肩から2~4m下までに止めた。

現地での調査は、平成4年7月20日に開始し、8月7日に終了した。調査面積は約450m<sup>2</sup>である。  
調査日誌（抄）

7.16 快晴 道具搬入 プレハブ搬入

7.20 快晴 調査区伐開 レベル移動

7.21 快晴 調査前地形測量開始 伐開

- |        |    | 発掘作業開始        | トレンチ設定    | 掘削   |
|--------|----|---------------|-----------|------|
| 7.22   | 快晴 | 調査前地形測量終了     |           |      |
|        |    | 平坦部掘削         | 遺構検出      |      |
| 7.23   | 快晴 | 平坦部掘削         |           |      |
| 7.24   | 快晴 | 平坦部掘削終了       | 堀切にトレンチ掘削 |      |
| 7.27   | 快晴 | 堀切・北側尾根掘削     |           |      |
| 7.28   | 快晴 | 堀切・北側尾根掘削     |           |      |
|        |    | セクション実測のレベル設定 |           |      |
| 7.29   | 快晴 | 堀切掘削          | 北側尾根掘削    |      |
|        |    | セクション実測       |           |      |
| 7.30   | 快晴 | 掘削作業終了        | 用具片付け     | 写真撮影 |
| 7.31   | 快晴 | 写真撮影          |           |      |
| 8. 3~5 |    | 台風来襲          |           |      |
| 8. 6   | 曇り | 道具搬出          | プレハブ撤収    |      |
| 8. 7   | 快晴 | 地形測量          | 現地調査終了    |      |

## II. 位置と環境

波田須城跡(1)は熊野市の市街地から北東約3kmの標高約100mの細い尾根上に築かれた中世城館跡である。

熊野地方の考古学的研究は、縄文時代と弥生時代の遺跡について発掘調査報告されているが、それ以後の遺跡については殆ど調査報告されていない。特



第1図 遺跡位置図 (1:100,000) (国土地理院・木本・1:50,000)

に中世の遺跡例は少なく、文献も極めて少ないため、この時期の熊野地方の状況は明らかではない。しかし、この地域が海上交通を通じて熊野灘沿岸・志摩国・伊勢湾岸、遠くは関東や関西との間でかなり交流を持っていたことは確かであり、東西を結ぶ海上交通の要所でもあったと言える。

そのためか熊野地方には伊賀地方とならんで多くの中世城館の存在が知られている。熊野市内に限っても30以上が報告されている。そのうち、海岸線近くに築かれているものを北から順に拾ってみると。

二木島湾には大日山城(2)、城之越城(3)、標ヶ峯城

(4)、新鹿には遊木城(5)、岩本城(6)、中山城(7)、父無山城(8)、波田須町には波田須城(1)、京楽尾城(9)、磯崎の猪鼻城(10)、その対岸には鬼ヶ城(11)がある。七里御浜沿岸には木本要害山城(12)、赤坂城(13)、母ノ尾城(14)、井土峯城(15)、口有馬城(16)、有馬本城(17)、二ツ石城(18)、向山城(19)、高家城(20)がある。

これらの中世城館は、いつ誰がどの様な情勢の中で築いたものか、幾つかの資料や伝承があるが、それらを裏付ける根拠に乏しく、断定することは難しい。

### III. 遺構

南北に延びる尾根のはば中央を分断するように堀切が造られ、その南側には3段の平坦面がある。調査区は最も北の平坦面のはば6割と堀切、その北に尾根の付け根まで延びる道が含まれる。調査区のすぐ南には神社跡の石組みの一部が残されている。

遺跡の層序は基本的に上層から数cmの腐植土、そ

の下に風化礫と思われる直径4mm以下の細礫～粗砂の層が10～20cmが堆積し、その下は岩盤である。堀切 尾根の先端部にある平坦面と尾根筋の道を分断して岩盤をU字型に削って造られている。上端部の幅約5.5m、深さ約2.5mである。埋土は上層から  
1. 腐植土 厚さ10cm、2. 腐植を含む黄褐色



第2図 遺跡地形図 (1:1,000)

標混じり土 厚さ60cm、3. 黄褐色標混じり土 厚さ30cmである。築造当時、堀切の上端の幅はもつと狭く約4mであったと推定できる。遺物は全く出土しなかった。

平坦部 堀切より南側に3段ある平坦面の最も高位の面である。東西7m、南北12mを調査したが、さらに南の調査区外へのびており、南北は約20mで

あったと推定される。建物跡や遺物は発見できなかつた。

道 幅約2mで、長さ30m分を確認したが、更に調査区外の尾根の付け根まで延びると推定される。自然地形をそのまま利用していると思われる。堀切を通る道と合流して尾根の西斜面を下って行くが、この部分は後後に造られた可能性が強い。

## IV. まとめ

今回の調査では、波田須城の平坦部の一部と堀切を確認することが出来た。

今回の調査が熊野地方での中世の遺跡としては稀な発掘調査であるため、出土遺物などにより波田須城の築城時期を解明する手掛かりが得られると共に、この地域の中世の様相を垣間見ることが出来ると期待された。残念ながら遺物は1点も出土しなかった

ため、波田須城の考古学的な時期など依然不明のままである。しかし建物跡が確認できなかつたことや立地条件から、居館的なものではなく、有事の際に使用したか、見張り台的な性格の物であったといえる。

今後の新たな中世文献資料の発見と、多方面からの研究の進展を期待したい。

### 註

- ①「三重県埋蔵文化財調査報告30 三重の中世城館——開発集中地域中世城跡分布調査報告——」三重県教育委員会編1976
- ②『熊野市史 上巻』熊野市史編纂委員会編1983
- ③「三重県熊野市有馬町 津ノ森遺跡発掘調査概要」熊野市教育委員会1983 津ノ森遺跡は弥生時代を中心とする遺跡であるが、2×2間の掘立柱建物が検出され、柱穴内から出土した山茶葉片などから鎌倉時代のものと推定されている。

『三重県南牟婁郡鵜殿村 堀殿遺跡発掘調査概要!』鵜殿村教育委員会1988 掘立柱建物は著記されていないが、鎌倉～室

町時代の山茶葉、土師器皿などが出土した。

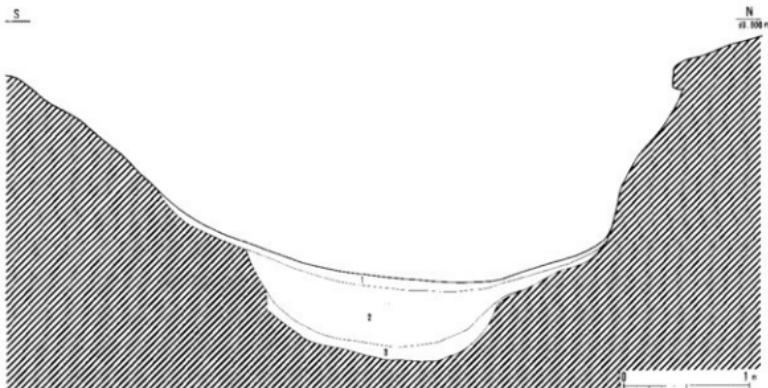
- ④ ②の他、下記の文献を参考にした。

橋本紀昭「九鬼氏について」『三重歴史研究創刊号』三重県教育委員会編1985

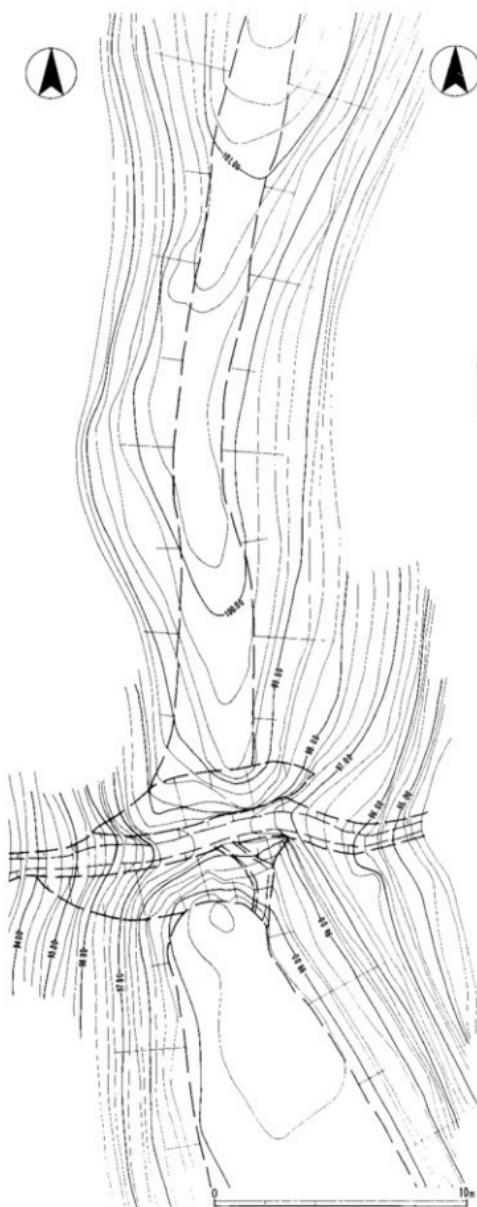
橋本紀昭「伊勢・志摩の交通と交易」『伊勢と熊野の海 海と列島文化8』小学校1992

齋藤明良「中世志摩国についての一考察」『年報中世史研究第9号』中世史研究会1984

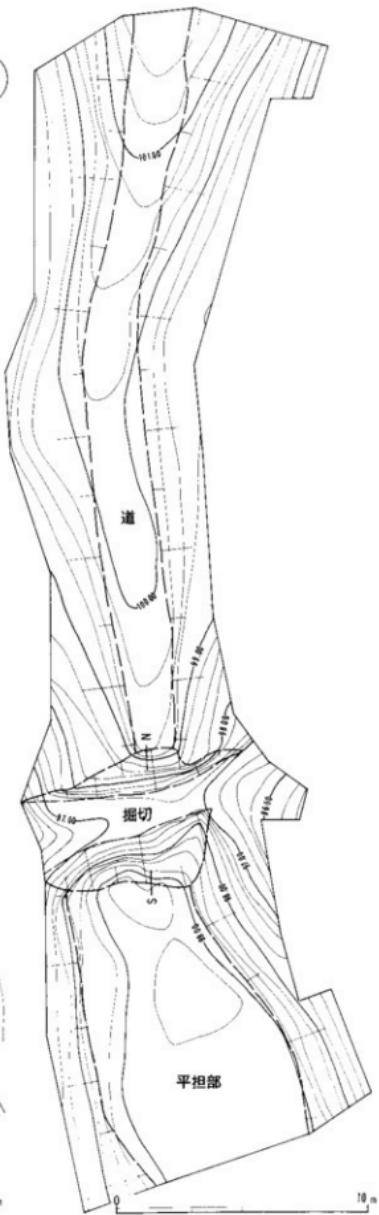
- ⑤ ①と同じ



第3図 堀切断面図 (1:40) 1 黒褐色腐植土 2 黄褐色標混土 (腐植含む) 3 黄褐色標混土

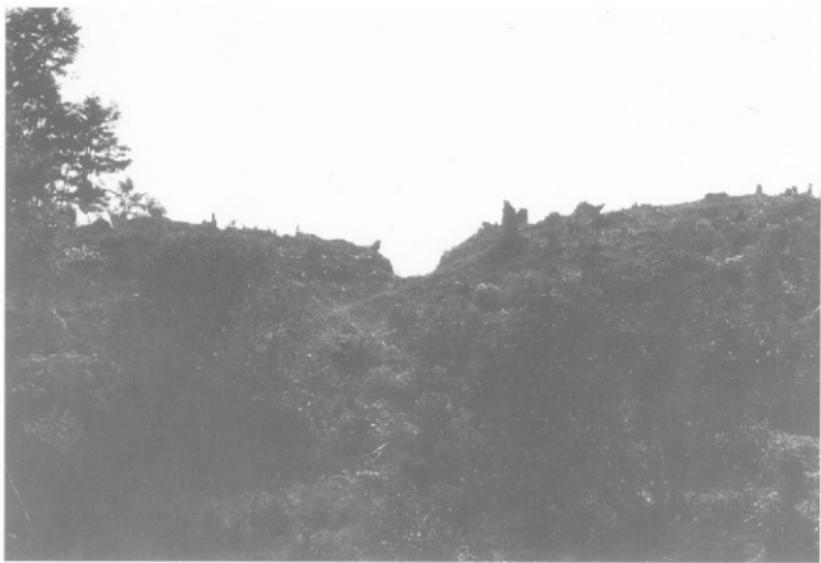


第4図 調査前地形測量図 (1 : 200)

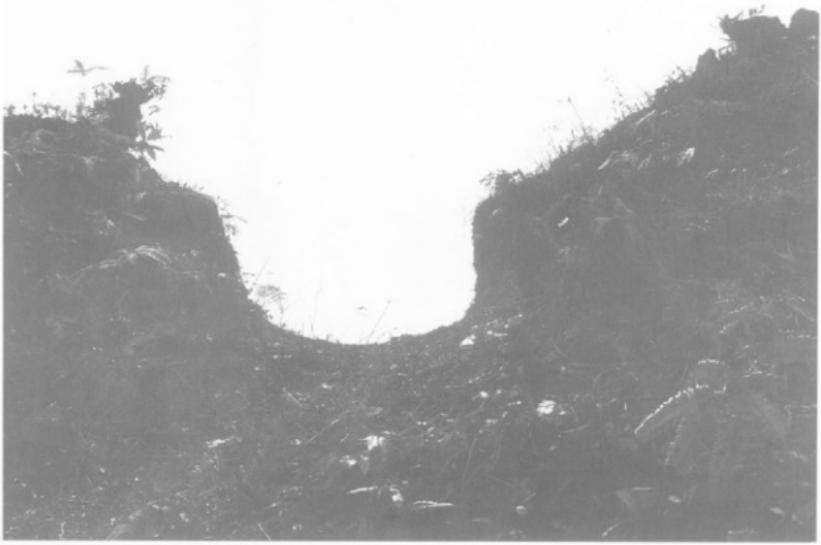


第5図 調査後地形測量図 (1 : 200)

P L A T E



調査前全景 東から



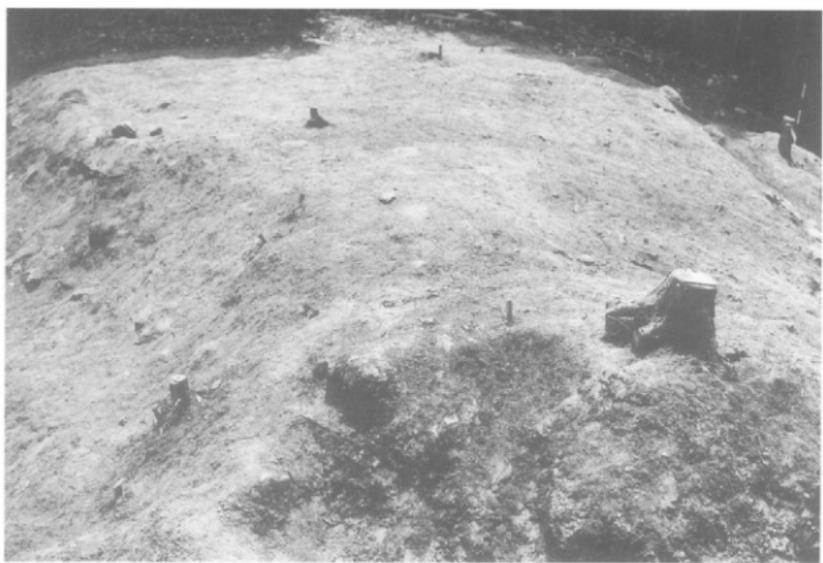
調査前近景 東から



調査区全景 東から



調査区全景 北から



平坦部 北から



堀切 東から

平成 5(1993) 年 3 月に刊行されたものをもとに  
平成 19(2007) 年 1 月にデジタル化しました。

---

三重県埋蔵文化財調査報告 110

## 波田須城跡発掘調査報告

—熊野市波田須町—

1993（平成 5）年 3 月

編 集 三重県埋蔵文化財センター  
発 行

印 刷 東 海 印 刷 株 式 会 社

---